

[006] 九大國文學會報 : 6

<https://doi.org/10.15017/15462>

出版情報 : 九大國文學會報. 6, pp.1-19, 1934-02-20. 九州帝國大學國文學會
バージョン :
権利関係 :

昭和九年二月

會報

第六號

九大國文學會

目次

研究室だより	延月清美	三
研究室より	藤井毅	八
九大國文科卒業論文題目		九
昭和八年度第二學期講義題目		一二
彙報		一二
昭和八年度決算報告		一七
會員住所異動		一八
編輯後記		一九

研究室だより

延 月 清 美

○研究発表機関を持ちたいといふ御意見が先輩の方々の間にあるゆいです。然し、國文學會の充實がいろ／＼の意味で先づ先決問題ではないでせうか。大いなる爆発をなす爲めにはもつと／＼潜勢力を養ふことが必要なもので、その爲めに先輩の方々の學問的な又經濟的な御盡力と御團結とをお願致したいと思ひます。

○最近入架の書籍中、寫本、古刊本の類を御紹介致します。

女中詞 寫一

金光明最勝王經音義攷證 寫一

木村正辭著
森立之書入
濱野知三郎氏藏本、寫

金光明最勝王經音義攷證 補 寫一

(同 右)

金光明最勝王經音註 寫一

黒川春村書入
濱野知三郎氏本、寫

悉曇初心鈔 寫一

天正十九年十一月十八日 玄祐寫

悉曇字記聞書 寫三

慶長四年己十一月吉日 成信寫

無門關(注) 刊一

寛永二年刊

小學方言講義 轉寫一

論語俚講 轉寫一

柳川方言河沙一撮 轉寫一

大字韻鏡 刊一

韻鏡 刊一

假名考 寫一

嘉永刪定神代文字考 刊一

五十音大意目錄 寫一

假名文字遣 刊一

異跡字辨 刊二

玉の緒末分御 刊三

言辭の音の貌 刊二

箋釋豊後風土記 刊一

井土周磐著
春日先生本

井土周磐著
春日先生本

錦悦山譯
東大國語研究室本

寛文二年刊

寛永十八年刊

帆尺萬里著

鶴峯戊申著

堀秀成著

寛永刊

中根元珪輯

長野義言著 弘化刊

荒木田守訓著

天保十一年刊

唐橋世濟著

源氏 (小鏡やうのもの) 寫三

源氏新釋惣考 刊一

すみれ峠 刊三

宇治拾遺物語

伊勢物語古意追考 寫一

大鏡 刊八

水鏡 刊三

續世繼 刊三

増鏡 刊十

曾我物語 刊十二

曾我物語 刊十二

平家物語 刊十二

平家物語評判秘傳抄 刊廿四

つれくさ 刊二 (嵯峨本風)

十輪院旧藏本

眞淵 文化十三年刊

文化十二年刊

慶安三年刊

正保三年刊

享保十一年刊

田中庄兵衛版
梅村彌右工門

古刊本

つれく草新註 (上中及び下)

つれく 咄口義 寫一

御伽婢子 刊六

宗祇秘中抄 刊一

牡丹花家集 刊三

枕詞燭明抄 刊三

古今和歌集 寫二

古今天眞獨朗之卷 (古今傳授)
(古今集口訣) 寫一

古今集序文脉経緯圖 寫一

詠草辨要 寫二

名所和歌集 寫一

名所和歌集 寫一 (上下)

清水春流著
寛文七年刊

田原秀武講

淺井了意
元禄十二年刊

延寶六年刊

元禄四年、跋アリ

下河辺長流著
白井寛蔭旧藏本

連歌師廣幢筆

寶永六年
風觀齋長雅寫

堀秀成著

依田貞鎮著
元文三年刊

八雲軒旧藏本

勅撰名所倭歌抄出 寫二

百人一首諺解 寫二

詞林三知抄 刊一(上下)

教訓抄 寫五

雅言童喻 刊一

干祿字書 寫一

下學集 刊一

平假名下學集 刊三

語錄釋義 寫四

考證千典

真草二行節用集 刊一(上下)

真草二行節用集 刊一(上下)

玉篇 刊七

八雲軒旧藏本

享保十九年
煩阿口授 光澤著

源泰季著
寬永十二年刊

河崎晴厚著
天保十五年刊

文化十四年刊本ノ寫

元和三年刊

貞亨五年刊

浪華稀齋留字友信撰
延享甲子之冬撰

僧了阿編

寬文五年刊

慶安二年刊

研究室より

藤井

毅

今や國文學の再生時代といふべきものゝ出現にめぐり遭つた私共は一方からいへば確に仕合です。此の仕合を永久のものにするか否かは我々の雙肩にかゝるものではないでせうか。

會から我々の眞剣な研究の前に樹文さるべき研究の發表機關として小冊子程度のものでよいから、時々発行出来る程になりたいと思ひます。そしてそれ等は會員自發的の結晶であつて欲しいことは勿論です。併せて一般の方々が、即ち先輩も在學生諸兄ももう少し九大國文科を思ふの心を起して下さることをお願い致します。私はよそに見る様な學問は嫌ひですが、然し九大國文學會をしてものとく親しい温い集ひの一團であらしめたいと存じます。そして又世人に更にくの存在價值を知らしめることも意義あることではないかと思ひます。

(二月六日)

九 大 国 文 科 卒 業 論 文 題 目 — 昭 和 三 年 以 降 昭 和 八 年 以 降 —

昭 和 三 年

一、 平家物語と佛教

長 敬 一 郎 氏

昭 和 四 年

一、 記紀歌謡研究

相 羽 尚 氏

一、 實朝研究

金 子 善 治 郎 氏

一、 萬葉集に現れたる山部赤人とその作歌とに就いて

新 谷 恒 藏 氏

一、 山上憶良の生涯と人生派的傾向とに就いて

野 崎 親 氏

一、 近松浄瑠璃曾我物の研究（主として劇化技巧について）

橋 本 元 二 郎 氏

一、 謡曲に現れたる時代思想の研究

松 井 哲 英 氏

昭 和 五 年

一、 阿國歌舞伎考

石 橋 宗 雄 氏

一、 近松の浄瑠璃作品に於ける引用句

北 島 義 夫 氏

一、 源氏物語の語法の研究

黒 岩 義 夫 氏

一、 本居宣長の歌學思想

副 島 典 史 氏

一、清少納言枕草子の研究

一、良寛の人と藝術

昭和六年

一、土佐日記の研究

一、本居宣長の古事記研究

一、蕪村の俳諧

一、芥川龍之介論

一、富士谷成章御杖父子の研究

一、芭蕉について

一、山家集研究

一、紫式部日記研究

一、撰中納言物語研究

一、橘曙覧論

一、古事記に現れたる英雄の性質

昭和七年

高木正藏氏

小笠原雛代氏

鶴野二彌氏

笠月清美氏

白井田敏雄氏

竹中哲氏

外山哲郎氏

畑茂氏

秦義種氏

藤井敬氏

山根廣也氏

井浦安喜氏

岡村寅氏

一、	落窪物語の研究	犬丸勝良氏
一、	山東京傳を中心とする洒落本の研究	加藤卓一氏
一、	王朝期物語にあらはれたる「もの」の研究	笠淵友一氏
一、	大伴家持の研究	瀬古 確氏
一、	上代に重心を置いて見たる笑話文學の展開	渡多江種一氏
一、	蜻蛉日記の研究	馬場 純一氏
一、	芭蕉の心境の研究	三 明 慕氏
一、	默阿彌論	森 一 男氏
一、	日本古代文學に現れたる神婚説話	萩 田 健三氏
昭和八年		
一、	萬葉集の理念並に其の展開	延壽寺末稱氏
一、	北原白秋の短歌	上 村 孝二氏
一、	萬葉集に現れたる奴婢及び調膚の民を中心として	西 田 琢磨氏
一、	十六夜日記の研究	林 毅 氏
一、	平安朝女流日記の凝視的研究（殊に更級の日記に就いて）	藤 井 毅 氏

昭和八年度第二學期講義題目

春日 教授 平安朝文學史概説

公 演習「源氏物語」

小島 助教授 中世歌學思想

公 演習「近松淨瑠璃」(心中二枚繪草紙、緋縮緬卯月紅葉)

公 演習「新古今集」

卯月ノ潤色)

彙報

(一、六月二十七日(金))

午後五時より第二學生集會所に於て例會開催。非常にむし暑い夜であつたが、春日、小島両先生を始め會員多數の御出席を得、歓談數刻、會を開られたのは午後九時頃であつた。

一、 九月十九日（火）

午後五時より第二學生集會所に於て例會開催。左記の如く春日、小島西先生及び笹淵氏から夏期訪書研究旅行談を拜聴し、極めて有意義な時を過した。

京都、東京、須谷、神宮方面

笹淵友一氏

大和萬葉遺蹟、名古屋、神宮、松坂 伊賀方面

小島助教

宗像、秋月、奈良、高野山、東京方面

春日教授

一、 十月六日（火）

午後五時より第二學生集會所に於て研究発表會開催、左記の如く研究発表があり、午後九時閉會した。

中世歌學の勃興期に就いて

福田純夫氏

好色五人女の研究

林川敏雄氏

一、 十一月十四日（火）

我が国文科野球チームは昨年度の敗戦以來、取薪嘗膽、再舉を期して猛練習を續けてゐたが、愈々その眞價を問ふべき日は終に來た。十一月十四日の學内野球大會！ 見よ、白線鮮かなグラウンドを縦横に馳驅するはその名も雄々しき新興日

本文學チームのメンバー、その眉間に窺はれる決死の形相、敵は野球部選手數名を殲し、優勝候補の隨へと下馬評高き鉄道突撃チーム、果して勝利の凱歌何れに上るか。この日天氣晴朗なれども千代原頭の松籟高し……と松内アナウンサーにでも放送させたいその日の我が國文科チームの活躍であつた。だが、天は遂に我にくみせず、二十三A對へで雄圖は空しく挫折した。當日のメンバー左の如し。

津 田 井 野 田 井 津 江

石 福 藤 波 多 山 平 船 青 長

三 投 捕 二 三 一 捕 左 右 中

(石津、波多野、長江三氏は國文専攻生にあらず)

一、十一月二十九日(水)

午後五時半より第二學生集會所に於て例會開催、左記の如く小西氏の研究發表の後、小島先生の御講話があり、先生御所藏、研究室所藏の近世小説の刊本の展覧並に春日先生御所藏の拓本の展覧があり、極めて有意義な時を過して午後十時散會した。

額田女王論

小西 敦 馬 氏

近世小説の板式

小 島 助 教 授

(右に關する刊本展観)

拓本(人麻呂關係、雅澄關係等)展観

春 日 教 授

一、 十二月十五日(金)

午後五時半より第二學生集會所に於て、昭和八年最後の例會を開く。左記の如く研究発表があり、歓談數刻、盛會裡に午後十時開會した。當日、筵月助手が御徽恙の爲め御欠席されたのは残念であつた。

明治末期より大正初期にかけての新浪漫主義概観

園 井 浩 雄 氏

村山漢古紹介

古 賀 英 雄 氏

一、 二月三日(土)

午後一時より第二學生集會所に於て、本年度卒業生の卒業論文発表會を開く。折柄の要をいつて會するもの春日、小島西先生を始め、筵月、秦、畑、井浦、筵淵、藤井毅の先輩諸氏、及び在學生十七名。先づ學部玄關に於て記念撮影をなし、それより直に會に移り、卒業生諸氏の積年の御研鑽になる論文の発表があり、両先

生の御批評を受け、近來稀に見る盛會を極めて、午後九時半開會した。當日、桑原、益富、松浦三氏が御所用の爲め御欠席されたのは残念であつた。因みに、卒業生氏名及び論文題目左の如し。

和泉式部の研究

青 敏 天 氏

讀波典侍日記の研究（作者及語法を中心として）

桑 原 正 雄 氏

長塚節の研究

佐 藤 駒 男 氏

緇流説話資料より——鎌倉期言語叢攷——

平 井 秀 文 氏

硯友社文學の没落

船 津 政 文 氏

井原西鶴 好色一代男

松 浦 正 夫 氏

夏目漱石論

益 富 治 保 氏

尚當日席上に於て昭和九年度幹事の選舉を行ひ、その結果を會長に報告し、會長より新幹事として林川敏雄、高石康男兩氏を指名さる。

一、二月十八日（日）

午後六時より新卒業生送別宴會開催の豫定。場所未定。

昭和八年度決算報告

(昭和九年二月十七日現在)

(收入之部)

項目

前年度繰越金	一一二四・九
特別會員	四四・〇
會費	一〇四・〇
卒業生	二九四・〇
在學生	一五四・〇
訓育費	

合計金

一七〇四・九

差引殘金總額

八拾九四九拾五錢也

(支出之部)

項目

第五籌會報印刷費	三八四・〇
第六籌會報印刷費	八四・〇
例會補助費合計	九四三・一
訓育費	一五四・〇
弔慰金	六四・〇
交通費	九六
郵稅	一四七・〇
雜費	七七

合計金

八〇四一・四

編輯後記

本誌は、経費の関係で、至極簡単な會報となりました。折角、活版の會報が出せたと思へば、またプリント版へと後退を餘儀なくされて甚だ残念ですが、尺取虫は伸びんとする時光づその身を縮めると申します。本誌の萎縮は、實に來年度新幹事の敏腕による第七號の飛躍を約束するものでございます。多分、第七號は、暑中休暇前に発行されることと思ひます。で、六月十日までに、玉稿を御寄せ下さいますやう、御願致します。

昨春、幹事就任以來、遺憾なくドラ幹振りを發揮いたしましたにも拘らず、どうやら一ヶ年の任期を終ることが出来さうなのは、全く春日、小島両先生、荏月助手を初め、會員諸氏の御指導の賜物でございます。厚く厚く御禮申し上げます。次第でございます。(藤野記)

昭和九年二月十五日印刷
昭和九年二月二十日發行
(非賣品)

編輯兼

藤野 邦 雄

發行人

山 崎 忠 夫

九大法文學部通用門前

印刷所

プリント 社

發行所

九大國文學研究室